人のいる風景 people

樫原 恵一さん

かしはら・けいいち

描き続けた15年。地蔵描き屋・時遊人

「好きで始めたことでも、誰かの役に立てることがある。」

まあるい顔にちょこんと手を合わせる愛らしいお地蔵さんなどを色紙に描き続ける樫原 恵一さん。市内のタウンプラザや札幌での展示会などで、自身の作品を通じ積極的な交流活動に勤しむ樫原さんに、お話を聞きました。

●絵描きはいつごろ始めましたか？

「平成5年ごろですか…。会社帰りに立ち寄った居酒屋で、カバンに入れてあったメモ帳に、ふと、お店の雰囲気をイタズラ描きしたんです。家に持ち帰り、翌朝、酔いが覚めてから改めてそのメモ帳を見ていると、『なんかいいなあ…。そうだ、こんなことをやろうか』と思うようになりました。それから、図書館へ足を運んで画材や紙のことを独学し、絵日記を始めたのです。」

●自称《地蔵描き屋》とのことですが、お地蔵さんにこだわる理由は？

「平成15年に、『世の中で公認されている数字の絵を描き上げ、（その達成感で）美味しいお酒を飲みたい』と思い立ち、先輩の紹介から、札幌円山88か所の石仏群を描きました。当初予定していた半年程度の制作期間が、1か月半に縮まるほど、のめり込みました。

42体目を描き終えて43体目に向かったときです、『ない！』、石仏がありませんでした。イタズラなどで壊されたのでしょうが、『さぁ、困った。88枚描かないと意味がない』。かなりの時間悩んだあげく、ひらめいて、お地蔵さんを描き、《足あと》を加えて、添え書きには、いないから『どこかへ外出中？かな?!』と。この43体目がいなかったことが縁で、今の地蔵描きの原点になったと思います。88枚を描き上げ、円山から札幌駅に向け、足どりも軽やかに居酒屋へ。達成感と充足感で、それはそれは、美味しいお酒をいただきましたよ。（笑）」

●これまでかなりの枚数、絵を描いたと思いますが、一番印象に残る絵は？

「とある居酒屋で、また性懲りもなくポンチ絵を描いていたときの話です。お客の一人のおじいさんから、『自分の顔』を描いてくれと頼まれました。初対面で突然のこと、びっくりしましたが、似顔絵に仕上げ、後日お渡ししました。実はその似顔絵は、病床の孫娘に、『毎日そばに居てあげられないけれど、おじいちゃんはいつも・いつでも一緒だよ』と伝えるための贈り物にされたそうです。

絵を描くことは、決して仕事や生活のためのものではなく、すべて自分を癒してくれる大切な時間…。自分が好きだから続けるのです。ですが、そのことが、人との交流を通じていつの間にか誰かの役に立てることがある。そう思うと、居酒屋であろうと、展示会であろうと、人との出会いを大切にしたいって、心から思うのです。」

●今後、描きたいと思っている大作などの構想はありますか？

「畳一枚ほどの大きな紙に、一人一人異なる姿のお地蔵さんを、びっしりと描きたいですね。おっと、あまり公言すると、プレッシャーになってしまうので、今後の構想は、内緒にしておきますね（笑）。」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

陽気で快活な話し口調とは裏腹に、持続力や、ことを成し遂げる力の強さが感じられる樫原さん。しかし、樫原さんの一番の魅力は、描くお地蔵さんたちとそっくりな、優しくあったかな笑顔だと思えます。

◀▲取材用に描き起こしていただいた2作品。女性のお地蔵さんには、イヤリングが描き込まれるなどの遊び心があります。

プロフィール

■樫原 恵一（かしはら けいいち）さん／豊里在住／日高町（旧・門別町）出身／昭和43年から平成27年までＮＴＴ（旧・電電公社）で勤め上げ、退職後は《地蔵描き》をライフワークとして、人との交流活動を続ける。／お問い合わせ先・☎090(8905)3330